京都市立芸術大学創立140周年記念 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA 開館10周年記念展

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展 横内賢太郎「誰もに何かが (Something for Everyone)」

# 会期:2020年9月12日(土)-10月25日(日) 11:00-19:00 入場無料

(月曜休館, 9月21日 (月・祝) は開館, 翌平日の9月23日 (水) を休館/ 10月3日(土) はニュイ・ブランシュ KYOTO 開催のため22:00まで延長開館)

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期または中止となる場合があります。予めご了承ください。

会場:京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

主催:京都市立芸術大学

企画:京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

企画協力:長坂有希(京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展)

Artist Support Project 関連展示協力作家:

D.D. (今村哲・染谷亜里可), 菊池聡太朗, 古橋まどか, 安田葉, P(art)Y LAB, 松本散歩, Huda Tula

京都市立芸術大学特別研究助成2020-006

### | 関連イベント |

### トークイベント(1)

横内賢太郎が2020年7月から9月までアーティスト・イン・ レジデンス・プログラムで滞在中のアートスペースpuntWG (https://puntwg.nl/en/)で開催中の成果発表展の会場と、 本展会場を繋いでのオンライントークイベントを開催します。

日時: 2020年9月26日(土) 19:00-

オンラインのみ, 要事前申込

(事前申込をされた方のみにURLをお知らせいたします)

言語:英語(他言語への通訳なし)

※puntWGとの共同開催のため、言語は英語のみとなります。 予めご了承ください。

日本語版として、後日レポート記事を@KCUAウェブサイトにて公開します。

## トークイベント②

横内賢太郎がインドネシアで運営するアートスペース Artist Support Project に関連して、サウンドアーティストの mamoru とのトークイベントを行います。

日時:2020年10月3日(土)19:00-オンライン参加を希望の場合は要事前申込

(事前申込をされた方のみにURLをお知らせいたします)

@KCUAでの当日視聴可

(当日はニュイ・ブランシュ KYOTO 開催のため、22:00まで延長開館)

### | 関連ウェブサイト |

横内賢太郎ウェブサイト▷ http://www.kentaroyokouchi.com Artist Support Project ▷ https://aspparangtritis.weebly.com | 会場・問い合わせ |

# 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒604-0052 京都市中京区押油小路町 238-1 Tel: 075-253-1509 / E-mail: gallery@kcua.ac.jp http://gallery.kcua.ac.jp



- \*京都市バス・京都バス「堀川御池」下車すぐ
- \*京都市営地下鉄東西線「二条城前」駅下車2番出口より徒歩3分

#### 「図版]

- 1. 村上華岳《羆》
- 1907年, 1440×830mm (画面サイズ), 絹布に墨, 顔料
- 2. 入江波光《春雨》
- 1905年, 1520×845mm (画面サイズ), 絹布に墨, 顔料
- 3. 横内腎太郎《Signs (aike)》
- 2010年, 1460×1120mm, サテン布に染料, メディウム, 胡粉 4. 同《drawing – えくやささ ごいよま》
- 4. 同《drawing えくやささ こいまま》 2012年, 1000×660mm, 木炭紙に木炭, グラファイト
- 同《cultural grafting study sb》
   2014年,1000×660mm,木炭紙に木炭,グラファイト
- 6. 同《cultural grafting study 4 (人)》 2011年, 315×240mm, 木炭紙に木炭, グラファイト
- 7. 同《cultural grafting ss》 2014年, 410×410mm, 木炭紙に木炭, グラファイト
- 8. 同《cultural grafting sk》 2014年, 410×410mm, 木炭紙に木炭, グラファイト
- 同《C. pagisore nation》
   2019年、1303×1940mm、シルクサテン布に染料、メディウム
- 10. 同《C. pagisore land》 2019年、1303×1940mm、シルクサテン布に染料、メディウム
- 同《C. pagisore people》
   2019年, 1303×1940mm, シルクサテン布に染料, メディウム
- 12. 同《Human behavior 失われるもの, 暖かい風。人称変化, 繰り返し》 2019 年, 750×550mm×25 sheets。 紙にインディゴベースト, テンベラ
- 13. 渡辺与平《狐》
  - 1906年, 845×1480mm (画面サイズ), 絹布に墨, 顔料
- 14. 横内賢太郎《cultural grafting study》 2016年,300×300mm,プリントバティック布にシルクスクリーンインク
- 15. 同《cultural grafting study (rh)》 2016年、300×300mm、プリントバティック布にシルクスクリーンインク
- 16. 同《cultural grafting study (em)》 2016年, 300×300mm, プリントバティック布にシルクスクリーンインク
- 竹内栖鳳《鶏》
   1906年,666×450mm (画面サイズ),紙に墨, 顔料
- 横内賢太郎《adapting form ta》
   2013-14年, 1307×972mm, シルクサテン布に染料,メディウム, 胡粉
- 19. 同《Human behavior》 2019年, 500×400mm, シルクサテン布にメディウム、 インディゴペースト, テンペラ

(横内賢太郎作品画像: © 怡土鉄夫)



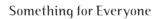






# 横内賢太郎

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展 京都市立芸術大学創立140周年記念/京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA開館10周年記念展



Kentaro Yokovchi

Commemorating 140 Years of Kyoto City University of Arts & 10 Years of Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA
University Art Museum, Kyoto City University of Arts Collection Exhibition



1





3.







5.





7.









12.

新型コロナウイルスの感染拡大に よって、人々の移動や対面でのコ ミュニケーションが大きく制限さ れるようになって数ヶ月が経ちま した。世界中の人々が、当たり前 だった 「これまで」を振り返りな がら、来るべき 「これから」 につ いて、立ち止まって考える日々を 過ごしています。この依然とした 非常事態の中で行われる本企画 では, あらためて異文化との接触 やコミュニケーション、またそれら がもたらすものについて、京都市 立芸術大学芸術資料館収蔵品, また本学大学院美術研究科博士 (後期)課程修了生の横内腎太郎 の現在進行形の実践と思考の中 に見出すことを試みます。

本学芸術資料館には, 明治期か ら現在まで歴代の卒業・修了作 品が収蔵されています。これら の作品を順に辿ると、時代を追う ごとに表現の傾向が移り変わって いくのに気づかされます。最初期 の特筆すべき変化としては、1903 年の京都市紀念動物園(現在の京 都市動物園) 開園以後, 動物が積 極的に描かれるようになったこと や, 欧州視察で知見を得た竹内 栖鳳 (1864-1942) をはじめとする 当時の教員から学んだ西洋画表 現からの影響などが挙げられま す。本企画では、これらの「出会い」 が作家たちにもたらしたものとその 受容のあり方を、入江波光 (1887-1948), 渡辺与平 (1889-1912), 村 上華岳 (1888-1939) の3名の画家 の卒業作品から考察します。

そして、2階の展示室では、横内 腎太郎による「誰もに何かが(Something for Everyone) | が展開され ます。横内は「文化的接ぎ木」を キーワードに、 さまざまな文化的・ 歴史的背景を持つイメージをメ ディウムによって画面上に転写し, ステイニングの技法(下地処理を行 わない画布に絵具を染み込ませる) を 用いてそれらの図像を画面上で 再接続する絵画作品を制作して きました。その姿には、本企画で 取り上げる明治期の作家たちが, 模写による学習からはじめて, 自 らの表現を模索していった様が 重なるようでもあります。

2007年に本学大学院美術研究 科博士課程を修了して以後,数年 間日本で作家活動を続けたのち, 横内は2014年にインドネシアに 移住します。 調査や活動を続ける傍ら、自宅を アートスペース 「Artist Support Project | とし、自身の絵画による 実践とは別の形で文化と交流に ついて考えていくプロジェクトを 運営します。そして、そうしたなか で浮かび上がってきた新たな課題 に挑戦すべく、2020年春にオラン ダに拠点を移すことになります。本 企画では、各地で制作した作品に 加え,「Artist Support Project」 での活動のアーカイブも展示し、 横内がアーティストとして、異文化 に属する文物のイメージの接続. 人々の交流についてどのように思 考を巡らせているのかを包括的 に提示します。

























Artist Support Project

移動や対面でのコミュニケーショ ンが叶わず、オンラインにそのほ とんどを代えざるを得ない日々 は、まだしばらく続くことでしょう。 自分の前にあるディスプレイの画 面とヘッドフォンを通して出会う 人々、出会う世界は近いようで遠 く、それらに心奪われるというよ りは、いつしか内省している自分 に気づくことの方が多いのではな いでしょうか。いまは、外からの 刺激を糧にして動くのではなく. 立ち止まっているからこそ見えてく るものに目を向け、聞こえてくるも のに耳をすまし、未来に備えて自 分の中に「考えをたくわえるとき」 なのかもしれません。このような 時代において本企画が「これか ら | のためのたくわえとなる [出 会い | をもたらすものの一つとな ることを願います。





18.



19.

Several months have now passed since our abilities to move around and have face-to-face communication became immensely restricted by the coronavirus pandemic. People all over the world have spent this time looking back on what they previously took for granted while also contemplating what is to come. Planned during the national state of emergency, this pair of exhibitions is an attempt to discover things about communication and contact with different cultures, and what that communication and contact bring us, in works from the collection of the University Art Museum, Kyoto City University of Arts, and in the current practices and ideas of Kentaro Yokouchi, who completed the doctoral program at the Kyoto City University of Arts Graduate School of Arts. The University Art Museum features a collection of work by alumni from the Meiji period (1868-1912) to the present. Tracing these artworks in chronological order reveals insights about how artistic expression has shifted with the times. Of particular note among the works in the early period of the collection, we can detect that animals became a common choice of subject following the opening of what is now Kvoto City Zoo in 1903, and the distinct influence of

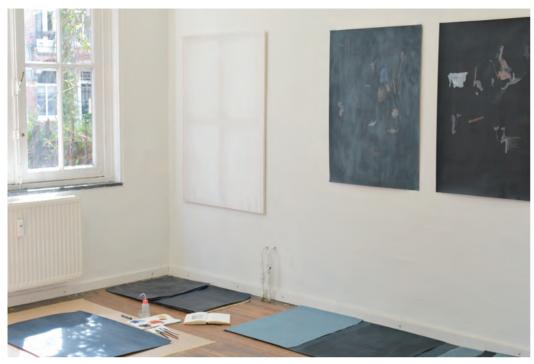
Western-style painting learned from Seiho Takeuchi and other teachers at the university at the time that they had acquired from trips to Europe. The exhibition considers what these "encounters" provided for the artists as well as how they were received in the graduation works of three painters: Hako Irie (1887-1948), Yohei Watanabe (1888-1912), and Kagaku Murakami (1888-1939). The second floor of the venue features another exhibition, "Kentaro Yokouchi: Something for Everyone." With a focus on what he calls "cultural grafting," Yokouchi copies over images from various cultural and historical contexts onto the surface of the

painting, and then uses a staining technique soaking paint into the untreated canvas to produce paintings where those images are reconnected. A parallel can be drawn with the way that the Meiji-period artists in the other exhibition were also searching for their forms of expression, which started with learning by copying. After completing the doctoral program at the Kyoto City University of Arts Graduate School of Arts in 2007, Kentaro Yokouchi worked as an artist for several years in Japan, before moving to Indonesia in 2014. Alongside his research and activities, he opened his home as an art space called Artist Support Project, where he runs projects exploring culture and exchange in a different way than his own painting practice. Wishing to take on the fresh challenges that have emerged from this, he then moved to the Netherlands in spring 2020. This exhibition features work he has created in the various locations of his practice as well as an archive of the Artist Support Project's activities, presenting a comprehensive view of the ideas behind how Yokouchi has, as an artist, interacted with people and connected with images of products belonging to other cultures.

Our current predicament where we are unable to move around or

have face-to-face communication. relying instead almost entirely on online means, is set to continue. The people or world we encounter through the headphones and computer screen in front of us are near and yet far, frequently leaving us more introspective than captivated. It is perhaps precisely because we cannot move around to receive external stimuli, but remain at a standstill, that we turn to examine the things now visible, the things now heard, forming a period of saving up ideas for what is to come. This exhibition hopes to serve as one means of bringing about encounters to store for the future during these times through which we are living.

1









nuntWC @ 7 4 - 2 \*



### 横内腎太郎 | よこうち・けんたろう

1979 年千葉県生まれ。武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業、2007 年京都市立芸術大学大学院博士(後期) 課程油画領域修了。2014 年よりポーラ美術振興財団在外研修員でインドネシアに渡り、その後ジョグジャカルタに移住。作品制作と並行し自宅を改装したアートスペース「Artist Support Project」を運営。2020 年春よりオランダに拠点を移す。光沢のあるサテン布に染料やメディウム等により滲みのある独特な画面を作り、東洋に対する西洋の関係性あるいは、交わりをあらわにする。主な展覧会に、「横内賢太郎 CONTACT」(愛知県美術館 コレクション展示室、2020年)、「Lintas House / ASP from Yogyakarta, Indonesia」(Basara House、大分、2019年)、「Collective Storytelling」(瀬戸内国際芸術祭、2019年)、「Collective Storytelling - Contemporary Art from Yogyakarta, Indonesia」(Synesthesia、NY、2019年)、「大和コレクション VII ディ・ドリーム つむがれた記憶」(沖縄県立博物館・美術館、2015年)、「木和コレクション VII ディ・ドリーム つむがれた記憶」(沖縄県立博物館・美術館、2015年)、「株源万歳――東アジア理想郷の系譜」(岡崎市美術博物館、2011年)、「MOT アニュアル 2010」(東京都現代美術館、2010年)、「VOCA 展 2008」(上野の森美術館、2008年) なと。岡崎市美術博物館、東京都現代美術館、豊田市美術館、高松市美術館にパブリックコレクションがある。

### Kentaro YOKOUCHI

Since 2005, he has been painting with color dye and satin cloth. In 2007 he received Ph.D (painting) Doctoral dissertation "Painting as Transformation", and also in 2008 received VOCA (vision of contemporary of art) award in Japan. Since 2011, he has been researching and producing the history of painting with criticism based on the concept of "cultural grafting". In 2014, he has been abroad in Yogyakarta and Indonesia with a grant from the POLA Art Foundation. After that, he launched the Artist Support Project (ASP) in 2015, and is currently engaged in making art work, exhibition planning and management, and international exchange activities.

### 入江波光しいりえ・はこう

1887年京都府上京区生まれ。1905年京都市立美術工芸学校卒業。1907年同校研究科在学中第1回文展に《夕月》が初入選。1911年京都市立絵画専門学校卒業。同校研究科修了後、同校嘱託として東京美術学校なとで古画の模写を行う。1918年第1回国画創作協会展で《降魔》が国画賞となり、翌年から会員となる。1922年渡欧。1928年に国画創作協会が解散した後は画壇を離れ、模写研究に努める一方、仏画などの水墨画研究を行った。1918年京都市立絵画専門学校助教授となり、1934年から没年まで同校教授、1948年没。

### 渡辺与平しわたなべ・よへい

1889年長崎市生まれ。旧姓宮崎。1902年京都市立美術工芸学校に入学。日本画を学ぶ傍ら、鹿子木孟郎に洋画を学ぶ。1906年同校卒業後、上京し、中村不折の太平洋画会研究所に学ぶが、翌年病を得て帰郷。1908年再上京し、同年第2回文展に《金さんと赤》が初入選。1910年第4回文展で《ネルのきもの》が三等賞を受賞。太平洋画会員となる。1906年頃から「ホトトギス」をはじめ、雑誌や新聞の挿画(コマ絵)の仕事をするようになる。これらのコマ絵は「コヘイ式」と呼ばれて人気があり、竹久夢二と並び称された。1912年没。

# 村上華岳 | むらかみ・かがく

1888年現在の大阪市北区に生まれる。 1907年京都市立美術工芸学校卒業。 1911年京都市立絵画専門学校卒業。同校研究科に進み竹内栖鳳に師事した。 早くから歌舞伎や文楽、浮世絵などに興味を示し、仏教美術にも深く傾倒した。1908年第2回文展で《驢馬に夏草》が初入選し三等賞を受ける。1918年、土田麦僊らとともに国画創作協会を結成。病気療養のために1923年芦屋へ転居。 1927年には神戸の養家に戻り、1928年国画創作協会解散後は個展中心の活動を行った。1939年没。